

Canforo 44

執筆者
(S.K.) 梶岡 秀一 (H.S.) 杉山 はるか
(T.N.) 長井 健 (A.T.) 田代 亜矢子
(N.T.) 武田 信孝 (R.N.) 野口 理佳
(H.Shi) 嶋原 悠 (H.L.) 石岡 ひとみ

企画展②

平成24年9月9日[日]～10月21日[日]

フランス北東部、ドイツと国境を接するアルザス地方のストラスブールは、欧州議会の本会議が行われる政治的中心地であると同時に、紀元前12年に建設され交通の要衝として栄えてきた古都でもあります。中でも周りを川に囲まれたグラン・ディル(「大きな島」の意)と呼ばれる区域はユネスコ世界遺産に登録されており、12-15世紀建立のノートル＝ダム大聖堂をはじめ、16-17世紀のコロンバージュ様式の家々、18世紀の司教宮殿などが密集する、さながら建築のテーマパークのような趣を呈しています。

この歴史の厚みを感じさせる都市に現代性の象徴として1998年開館した近現代美術館は、19世紀後半以降の新しい時代の作品を対象に約1万8千点に及ぶコレクションを形成しており、文化芸術立国フランスでも屈指の規模を誇っています。中四国以西で唯一の開催となる本展では、同美術館のコレクションをメインに、近郊のコルマルに位置するウンターリンデン美術館や香川県立ミュージアムのピカソ作品などを加えて、印象主義、象徴主義の時代から今日に至るまでの西洋美術を多角的に紹介致します。

煙が人の形を成したようなミステリアスな作風のウジェーヌ・カリエール、男爵家に生まれ花の画家として人気を博したロタール・フォン・ゼーバツハ、自然を愛し軽快で妙味があるフォルムを創造したジャン・アルブなど、アルザス地方ゆかりの美術家達の多彩な表現にも触れられる貴重な機会です。(N.T.)

ストラスブール美術館展



ロタール・フォン・ゼーバツハ《リラの花束》1894年 136.5×107cm
ストラスブール美術館蔵

企画展③

平成24年11月29日[木]～平成25年1月20日[日]

1774年18歳でフランス王妃となったマリー・アントワネットは、装いに趣向を凝らし始めます。ヘアモードにも気を遣い、大人の女性として一段と輝きを増した若き王妃は、人々の注目の的になります。それは、ルイ15世の妃や寵姫達が務めたロココ文化の庇護者の役割を引き継ぐ、新世代のヒロインの登場を意味していました。

その後、優雅に花開いた宮廷文化が爛熟の匂いを放ち始めると、これを払拭すべくスタンダードを示したのも実は王妃でした。例えば、公式訪問時に貴婦人が着用するローブは贅付きの荘重なものに限るように、王国内のハンカチの形状は全て正方形にするようにと、それぞれ85年2月と6月の布告で意向を表明しているのです。

さらには、胴衣なしで着られる綿モスリンのローブ・シュミーズを普段着に取り入れたり、動物性香料の香水が主流であった旧来の宮廷趣味を離れてスミレやバラの香りを纏うなど、斬新なエレガンスを体現することもありました。王朝文化を継承し発展させ、必要に応じて軌道修正し、時には新たな文化を先導する。王妃が果たした文化の牽引者としての役割は大きなものでした。

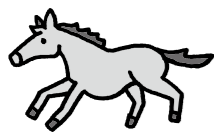
本展では、カルナヴァレ博物館やナポレオン財団の所蔵品をはじめ、古い門閥家の伝来品など貴重な美術工芸品、歴史資料をメインに、一流工房が再現した王妃好みのローブや室内装飾用テキスタイルなどを加えて、喜びと悲しみに彩られ光と影の交錯するマリー・アントワネットの生涯を回顧致します。(N.T.)

マリー・アントワネット物語展 (仮称)



ヴィジェールブラン《王妃マリー・アントワネット》1778年 81×65cm
ブルトゥイユ城蔵 © La Vie de MARIE-ANTOINETTE 2012-13

ウマのひとこと (編集後記)



今年度も美術館では、西洋や日本のさまざまな絵画や工芸品の展覧会やイベントが、目白押しです。私は、この4月から新しく美術館の仲間になりました。陶磁史に興味があります。美術とは何か、と日々自問自答しております。美術館は、緑あふれる堀之内に所在し、すばらしい芸術作品に囲まれています。感性を磨いて、魅力あふれる紙面づくりをしたいと思います。と思っています。どうぞよろしく願っています。(H.L.)

ご利用案内

■ 開館時間 9:40～18:00(入室は17:30まで)
※企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。各展覧会のページでお確かめください。
■ 休館日 月曜日
(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日)



愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511
<http://www.ehime-art.jp/>



企画展①

アントワープ王立美術館所蔵

ジェームズ・アンソール

— 写実と幻想の系譜 —

平成24年6月30日[土]～8月26日[日]

開館時間 9:40～18:00(入室は17:30まで)

■ 休館日: 月曜日(ただし7月2日、16日、8月6日は開館し、翌日が休館)

アンソールってどんな人?

ジェームズ・アンソール(1860-1949)は19世紀末から20世紀にかけて活躍したベルギーの画家です。彼は仮面や骸骨といったモチーフをこよなく愛しました。古今東西様々な芸術作品で表されてきたこれらのモチーフを、アンソールはいきいきとした生き物として絵画に登場させました。静物画に仮面の生き物が現れたり骸骨を身近な人物や自画像として表現したりと、色彩鮮やかに描き出されるアンソールのユーモアは人々を魅了し続けています。

一方でアンソールは画業の初期において写実的な表現を追求していました。19世紀には写実主義、つまり目の前にある現実を理想化することなく表現する思潮が保守的なアカデミズムを揺るがす大きな動きとなっていました。アンソールもまた、家族や友人の姿や風景などを克明に、時に生々しく描き出しています。筆者の一押しは海

景画です。画家が生涯の殆どを過ごした沿岸の町オステンドはリゾート地として名高く、今もアンソールが描いたままの海が見られるとか。

当初そのセンセーショナルな作品は世間に受け入れられず拒絶すらされました。しかし次第にその独創的な表現への評価が高まり、今日ではシュールレアリスムや表現主義など20世紀美術の先駆けともいわれています。

展覧会の見どころ

本展ではアンソールの代表的な作品と併せて彼に影響を与えた画家たちの作品を展示し、アンソールが追求した写実と幻想を、それが培われたヨーロッパ美術の系譜と共に迫ります。フランドルの画家や同時代の画家の作品と見比べながら、アンソールの移ろう光を巧みに捉える観察眼、鮮やかな色彩、そして想像力とユーモアに満ちた幻想の世界をお楽しみください。(H.Shi.)

関連イベント

記念講演会

- 7月8日(日) 14:00～15:30
- 講師: 龍野有子氏(岡山大学文学部准教授)「ベルギー絵画史の中のアンソール」
- 場所: 新館1階 講堂
- ※ 参加無料 要申込
愛媛県美術館学芸課 Tel 089-932-0010まで
先着120名

学芸員によるフロアレクチャー

- 7月14日(土)、28日(土)、8月25日(土) 各14:00～15:00
- 場所: 企画展示室
- ※ 申込不要。ただし企画展観覧料が必要です

企画展関連講座「美術×ガイコツ？」

- 8月4日(土) 14:00～15:00
- 講師: 当館学芸員
- 場所: 新館2階 研修室
- ※ 参加無料。申込不要

たんけんはっけんアンソール

- 8月5日(日)、12日(日)、19日(日)、26日(日) 各10:00～17:00
- 場所: 企画展示室
- ※ 各時間帯いつでも参加できます。各回同じ内容です。申込不要。企画展示室内で随時受付。ただし企画展観覧料が必要です



福井江太郎 ライブペインティング

現代の日本画家 福井江太郎といえば今や美術界の人気者ですが、当館では、平成17年度に福井さんの初期の人物画2点とダチョウの絵の代表作2点をまとめてご寄贈賜り、以来、常設展示で公開する度にご来館の皆様からご好評いただいています。このたび、平成17年からの3年間に発表されたFLOWERシリーズの代表作5点もご寄贈賜りましたので、これを記念して、今までに収蔵した福井さんの作品9点を全て公開する特集展示「福井江太郎の花鳥」を開催するとともに「福井江太郎ライブペインティング」を3回開催しました。



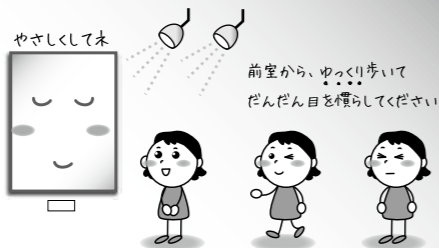
ライブペインティングはお客様の眼前で即興で絵を描いてみせるイベントで、江戸時代以来の「席画」、「席上揮毫」の伝統にもつながります。福井さんの曾祖父は明治の日本画家、福井江亭であり、もちろん数多く席画を手がけたはず。また、福井さんの絵の魅力の一つは墨線の美にありますが、筆墨の生命を重んじる精神は席画を楽しんだ昔の書画家の精神にも通じます。ライブペインティングは現代の席画といえます。5月5日(土)と6日(日)には、2×4メートル以上の紙に、筆を用いず手を用いて勢いよくダチョウの群を描いてくださいました。2日間の絵をつなげると一枚の絵になる点も楽しいところで、まるで巨大な画卷のようです。手で描くというも「指頭画」の伝統に通じます。5月13日(日)にはBMWの車体に筆でダチョウの群を描き、優美な彩色も施し、金箔も添える本格的な作画を一日かけて見せてくださいました。ドイツの重厚な高級車と日本の軽妙な席画の伝統との調和です。3回のイベントに、延べ千人近くのご来場がありました。(S.K.)

つぶやき

今年も西条市主催の伊藤五百亀の彫刻に関する講演会の講師をつとめる予定です。愛媛県西条市出身の彫刻家で、京都三条大橋の高山彦九郎像の作者です。(S.K.)

作品保存のおはなし **照度**

今回で4回目となった「作品保存のおはなし」。今回は、照度(光)を取り上げます。美術館にいられて、鑑賞中に展示室の中が暗く、作品は元より作品の題名や作家名が書いてあるキャプションが読みづらいとお声をお聞きすることがあります。人がモノを見ることができるのは、光があるからです。光が弱くなると見え難くなるのは当然の話ですが、モノは光に当たると必ず退色していきます。車の中や窓の付近に置いたモノが、色褪せた経験をお持ちの方も多と思います。作品も同じです。光を当てて鑑賞すること⇒退色していくことになり。そのため、美術館では、1年間の照度と展示日数を計算して展示しています。通常、事務作業をする屋内では、1000ルクス以上の明るさがありますが、美術館において、紙に描かれた作品は50~80ルクス、光に強いとされる画布に描かれた作品でも100~150ルクス程度に制限した上で、2・3



ヶ月間、展示しています。写真のフラッシュという強烈な光を作品に当てるとこの年間照度は一気に上がってしまいます。そのため、美術館ではフラッシュ撮影厳禁となっています。当館のエントランスはガラス張り、中庭の大きな楠を眺め、自然光が優しく降り注ぎ、良い空間だとお褒め戴くことがありますが、エントランスが明るく、展示室との差が激しくなってしまうという欠点にも繋がっています。そのため、展示室には小さいですが前室を設け、目を慣らす空間を設置しています。少しゆっくりとした歩調で、目を慣らしていただくと暗さに慣れて作品を堪能していただけます。作品保護のため、ご協力をお願いします。(A.T.)

つぶやき

4月から当館で勤務しています。来館された方々や作品との出会いはとても新鮮なもので、充実した日々を過ごしています。特に当館アトリエでの活動では、利用者の方々から教えていただくことも多く、ありがたく思っています。(R.N.)

INFORMATION

企画展示案内
「友の会発足40周年記念
出光美術館所蔵
文人画名画展(仮)」

12月22日[土]~1月27日[日]
出光興産の創業者であり、出光美術館の創設者出光佐三のコレクションから、池大雅や与謝蕪村、浦上玉堂、田能村竹田、富岡鉄斎など日本の文人画名画を紹介します。

「手塚治虫展(仮)」

2月16日[土]~3月31日[日]
手塚治虫の描いた漫画やアニメの実物原稿や、「鉄腕アトム」から昨年公開の映画「ブッダ」のアニメ映像により手塚治虫の創造の歴史を辿る展覧会です。

開館記念日事業

11月25日[日]
開館記念日を祝し、多くの方に美術館にご来館いただき、美術に親しんでいただける一日として、常設展観覧料を無料とし、各種イベントを実施します。



所蔵品展のススメ

Canforo 44

執筆者
(S.K.) 梶岡 秀一 (H.S.) 杉山 はるか
(T.N.) 長井 健 (A.T.) 田代 亜矢子
(N.T.) 武田 信孝 (R.N.) 野口 理佳
(H.Sh.) 鴨原 悠 (H.L.) 石岡 ひとみ

他所から作品を拝借して開催する「企画展(「特別展」などと呼ぶところもありますが)」と、自らのコレクションを紹介する「常設展」。多くの美術館・博物館の活動はこの両輪で支えられています。しかし常設展は、「いつ行っても同じものしか出てない」というマイナスイメージが定着してしまっていて、どうしても企画展の影に隠れがちです。

公立の美術館・博物館のコレクションは、その地域の財産でもあります。なので、作品を単に「収蔵」しておくだけでは、意味がありません。「公開」し、見て、知っていただくことで初めて、作品の存在意義が出てきます。美術館の「基礎体力」は、コレクションと常設展の厚み・ユニークさにかかっているといっても過言ではないのです。

当館のコレクションの総数は、11,000点以上。なるべく多くの作品におまじいいただくために、年間4回程度の展示替えを行いながら、毎回様々なテーマを設定して、コレクションをさらに魅力的にご覧いただけるように心がけています。「常設展」という呼称も避け、「所蔵品展(所蔵品による特集展示)」として、同時期に開催している企画展との連動、「生誕・没後●●年」といった節目を迎える作家の顕彰、時には「金と銀」など色や素材に着目したり…取り上げるテーマはなるべく幅広く、だからこそ、来るたび、見るたびに新たな発見・感動があってほしいと願い、われわれ学芸員は日々頭をひねっています。

7月27日(金)から10月14日(日)までの所蔵品展では、企画展「ジェームズ・アンスロー写実と幻想の系譜」と連動し、「洋画にみる写実/幻想」として本県出身の柳瀬正夢などを展示するほか、「文人画」「旅-10の作品による」「西洋美術の精華」などのテーマを予定しています。企画展をご覧になる場合は、所蔵品展は無料ですので、どちらも見ないともったいないですよ!(T.N.)



柳瀬正夢〈仮面〉 昭和11(1936)年

普及レポート

1日講座 「コッパであそぼう!」報告

連休最後の5月6日(日)に、今年最初の美術館講座「コッパであそぼう!」を開催しました。「コッパ」として、流木・自然木・角材などイロイロな木材を組み合わせてロボットをつくらうという内容。対象は、小学生以下の親子10組。事前予約で満員だったにも関わらず、1・2日前からキャンセルの連絡が入り、実際の参加者は5組13名。ちょっと寂しい開催となってしまいました。



しかし、ゆったりと作業をすることができたのも事実。木材の取り合いもなく、ゆっくりと木端を見て選ぶことができました。大人が手にとるのは、形や色に微妙な変化がある流木や自然木でしたが、子どもたちの興味は様々な形にカットしたコッパに集まり、細かな凸凹や綺麗な塗装の額縁の木端を見つけては、歓声を上げ本体や背景に貼り付けていました。気に入った木材を探し、鋸で切ったり、釘を打ったりというシンプルな作業に終りましたが、あっという間に時間が過ぎていました。初めて鋸を使うという参加者も、真剣な表情で上手に扱うことができ、色んな形の木っ端をボンドで貼り付けたり、ドリルで本体に穴を開けて小枝を挿して髪や鼻を模したりと様々な作品ができあがりました。



7月29日(日)にも同様の講座を開催します。どうぞ、楽しみに!(A.T.)

世界遺産 ヴェネツィア展



平成24年5月26日[土]~7月16日[月]

イタリアの都市ヴェネツィアは、かつて共和国として東地中海一帯を中心に支配下において繁栄し、豊かな芸術文化が花開きました。今回の展覧会では、世界中の人々が訪れるこの美しい街の歴史や文化を、ヴェネツィア市立美術館群が所蔵する作品によりご紹介いたしました。

ヴェネツィアといえば、ガラスの美しさがよく知られています。本島から1キロほど北のムラーノ島では、ガラスの一大産地として数多くの職人が時代の先端を行くガラス製品を生み出しました。世界中の貴族たちが競ってこれを手に入れ、厳重に封印されていた技術も時代を経て西欧各地に広がっていきました。

今回の見どころはガラスだけではなく、ロレンツォ・ロットやカナレットなどのヴェネツィアを代表する画家による色彩豊かな作品や、貴族の華やかな暮らしが垣間見える服飾品や工芸品、海洋国家としての歴史を物語る資料など、幅広い視点によりヴェネツィアの魅力をお伝えしました。

ヴェネツィアを訪れたことがない方でも、街の雰囲気やその成り立ちを体感していただけたことでしょうか。また、展示室でヴェネツィア気分を味わっていた後は、ぜひ本当の街の空気を吸いに出かけていただきたいと思います。(H.S.)